

あんぽ柿のブランド化による産地復興

ふくしま未来農協(福島県)

取組の概要

- あんぽ柿加工選別包装施設「あんぽ工房みらい」の本格稼働により農業者の作業負担軽減化、生産基盤の拡充と安定化に成功し、出荷数が回復。
- 地域内で高い技術を持つ流通・製造業界との連携によりブランド力の向上を目指す。

事業化(プロジェクト化)成功のポイント

1 あんぽ柿産地復興の取組について

東京電力第一原子力発電所事故による放射性物質の影響で、伊達地方の「あんぽ柿」の生産は平成23(2011)年、24(2012)年と全面自粛を余儀なくされたが、農協は早期に国や県、農業団体等に呼びかけを行い、生産再開への意思統一を図った。そこで、管内の果樹全体の半分以上を占める柿から作られる特産品「あんぽ柿」を作り続ける取組に挑むことになった。

2 徹底した除染作業と検査による安全性の確保

県からの加工自粛要請により出荷停止となっていた2年間、農協は生産者と協力し、干し場の清掃と除染を行った。平成25(2013)年には福島県あんぽ柿産地振興協会が設立され、ほ場や製品の検査基準を設定。幼果期、収穫前の放射能検査、非破壊検査機器による製品の全量検査を行い、基準を満たした製品に限り検査済みシールが貼付され出荷・販売される仕組みが構築された。

3 生産基盤安定化の役割を担うあんぽ柿加工選別包装施設「あんぽ工房みらい」

農協があんぽ柿の加工選別包装施設「あんぽ工房みらい」を平成28(2016)年3月に完成。この施設は、高齢化が進むあんぽ柿生産者の作業負担軽減、衛生管理の徹底、生産基盤の安定、地域の雇用の拡大を目的として設立された、最新の自然乾燥、選別システムを備える国内屈指の大規模施設。加工・出荷が機械化されたことで、農業者の生産意欲向上を牽引し、自粛していた出荷が増え、販売高も回復。

4 オリジナル6次産業化商品開発で新たな購買層と販路の開拓を目指す

あんぽ柿のブランド化を目指し、農協が主体となって地元の製菓業者と連携し、和菓子や洋菓子など、様々な6次産業化商品が開発販売されている。若年層が洋菓子を好む傾向を踏まえ菓子店に委託加工した商品は、あんぽ柿のPRに役立っている。

取組の実績

＜ふくしま未来農協伊達地区のあんぽ柿年産別出荷実績＞

- 震災から2年が経過した平成25(2013)年から徐々に出荷量が回復している。

